



柳瀬川堤の桜



春爛漫



跡見学園の桜



「こぶし」は新座の木

平林寺の半僧坊大祭で
春たけなわに

去る二月十四日（土）新座市文化協会は、講演会、「新座の今昔その2」を開催、人口が急増して「市」に移り変わるころ、貴重な体験をされた三人の講師のお話をうかがった。



所信を述べる笹倉会長、その左は瀧島さん、続いて石山さん

新座の今昔・町から市へ

盛会だった新座市文化協会文化講演会

冒頭で笹倉会長は、「文化はゆくり成長する植物である。その成長の速度を速めることも、その進化の順序をかえることも出来ない（作曲家コダーイ）」という言葉をもって文化活動への所信を述べた。

引き続き、学芸員斯波治さんの司会で講演が始まり、片山在住の瀧島浩二さんは、農家に生まれ、野良仕事を手伝いながらながら過ごした幼年時代の追憶を語った。瀧島さんは、子供の頃の行事や遊び、思い出の風景を描き、すでに公民館などで展示されたが、当日会場にも飾られて、参加者は感銘をもって拝見した。



大竹さん



瀧島さん、石山さん



石山哲夫さんは野火止生れ、新座市文化財保護審議会委員のほか、武州里神楽のトップとして、その保存会々長を務める。大竹京子さんは、大和田在住だが、お生れは野火止、農家に嫁がれて農業に従事されているが、農業婦人のサークル、生活改善クラブの連合会長を務めている。



挨拶する西山学長



市民大学々長の西山賢二教授の挨拶で始まった発表会で、受講生緊張した面持ちで登壇、学術論文の域に届くかと思われるアカデミックな内容のレポートを発表した。志木のまちを再発見した驚きと喜びに溢れ、ユーモアに満ちたエッセイもあり、発表は長時間にわたったが、和気あいあい、実りのある楽しい会であった。

十三名の終了生が卒論を発表

志木のまちボランティア案内人養成講座 △歴史・自然部門▽

- CONTENTS**
- PAGE 1 春爛漫 桜まつり 花まつり
新座市文化協会 講演会 新座の今昔
志木のまち案内人講座 終了
 - PAGE 2 この人長井長義
地域情報 新座市・志木市では・・・
 - PAGE 3 Bird's Eye 東京もの語り
景観 隅田川の橋梁 その三 永大橋
 - PAGE 4 地域の先駆
町立志木商業学校の追憶 その三



この人 長井 長義

プロローグ

風雲急を告げる幕末、弘化二年（1845）、長井長義は徳島藩の典医の家に生まれた。優れた才能が見出された彼は、慶応二年（1866）藩の命によって長崎に留学、蘭学を修業した。つづいて江戸に赴き、大学東校（東京大学医学部の前身）で医学を学び、明治四年（1871）、政府の第二回海外留学生に選ばれた。アメリカを経てヨーロッパに渡り、ベルリン大学に入学、医学の志望を化学に変えた長井は、明治十二年ホフマン教授の化学教室の助手に抜擢された。

当時我が国の薬学、薬業関係者は近代化を急ぎ、西欧の科学・技術導入の道を模索していた。すでに滞独十年を越え、現地で地位を得て研究生生活を送っていた長井に白羽の矢が立ち、国内の指導者は揃って彼の帰国を要請した。長井は遂にこれを受諾、久々に日本に戻って東京大学教授の任に就いた。西欧の最新の化学、薬学教育・研究システムを我が国で構築すべく、全力を傾注した。また我が国の薬事行政、製薬事業の基礎を固めるために活躍した。

長井長義の輝かしい研究業績は、漢方薬マオウの成分、エフェドリンの発見である。気管支喘息の治療に欠かせない医薬品を創製、西洋医学の新しい治療法を確立して、漢方に依存していた東洋の医療との橋渡しに成功した。

長井はドイツの大学で職を得、ベルリンでの滞在はすでに



ただなか

十三年にもなっていた。明治十六年のことである。ライン河に沿ったホテルで、あどけないドイツ娘を見初めて突然恋をする。娘の名前は「テレゼ・シューマッハ」、ライン河を下ってコブレツツで合流する支流モーゼルの流域に、アンダーナッハという町があるが、シューマッハ家はそこ

で石材業と運送業を営む旧家である。熱い想いを寄せつつ、夢中になつてライン河に沿って、右往左往しつつ、必死に娘を追いかけた。このロマンスは、長井が東大教授となつてから、再渡独して実を結び、ようやく結婚に漕ぎ着けたのであつた。

その頃は武蔵野のま直中に在った東京渋谷の邸宅で、長井は夫人テレゼとともに日独の文化交流に励み、また夫妻は女子の高等教育にも献身的な努力を傾けた。

彼は筆まめで、明治四年初めて米欧に渡航したさい、旅行中の見聞を、詳しく両親宛てて書き送っている。その書翰には、鎖国時代の侍が突然西欧の文化に触れ、近代の新しいサイエンス・テクノロジーに曝されたドラマが語られていて楽しいが、現代社会で日々を送るものにとつて、先人が格闘する有様は新鮮な感動となり、歴史の重さを痛感させて止まない。

生い立ち

長井長義は徳島市内で生まれた。吉野川河口に位置し、その三角州上に発達した徳島市は、市内に百以上もの川が流れる。平坦な徳島平野の市内のほぼ中央にお腕状の眉山がそびえ、風光明媚な景観を創り出している。彼の生家は、眉山に近い屋敷町中常三島町に在った。

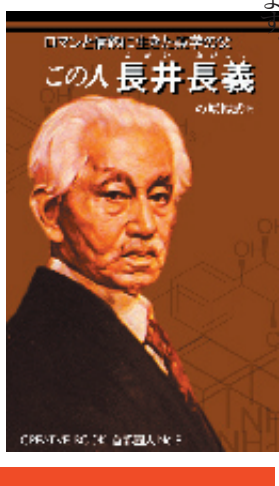
長井家の祖先は源氏の名閥と言われ、初代琳泉は当時の徳島

は自ずから祖母の手に委ねられた。

家庭に在つては玄米を搗きながら四書を素読、城下町で育った朝吉は九才を迎え、阿波藩の漢学塾に通う傍ら、洋式訓練にも出席した。

このころ、米国の提督ペリー浦賀に来航、しかも徳川将軍家慶が亡くなつて、家定が第十三代将軍となり、国内外は多事多難であつた。朝吉と継母との折り合いが悪いことを不憫と思ひ召した城主は、彼を父親と同道で登城させ、公の小姓として仕えさせた。父琳章は途上で野生の植物を採り、その名称と薬物作用を教えることを常とした。朝吉に対して、殿中ではすでに聡明の萌しを見出し、このことが長崎への留学、さらに欧州留学へと展開した。

「クリエティブ・ブック」は、NPO「市民フォーラム」が編集、発売元はブックング、全国書店で発売中、「アマゾン」「楽天ブックス」などのネットで購入でき



「首都圏人」第9号

幕末に生まれ海外へ留学

化学・薬学の基礎を作った

「ロマンと情熱の志士」この人長井長義

の原博武著

208ページ新書版 定価945円

明治政府初めての海外留学生のドラマに充ちた米欧見聞書翰を初公開

ライン河畔で少女への恋、帰国後漢方薬

のマオウから「エフェドリン」発見の偉業

城主淡路守蜂須賀綱矩に仕官

し、元禄十一年に御医師を仰せ

付けられた。七代長済琳章は次

席典医として任官し、同藩の主

席典医興津仙甫の妹田鶴子と縁

を結んだ。弘化二年（1845）

七月、嫡子として長義が生まれ、

幼名を朝吉と称した。母君は嘉

永二年廿五才で亡くなったが、

ときに彼は五歳に過ぎず、養育

は自ずから祖母の手に委ねられ

た。

安政二年から同六年に至る幕末では尊王攘夷の風が吹き荒れ、その中心的な人材は処刑された（安政の大獄）。一方つづく万延元年には、幕府の横暴に立ち向う勢力は大老井伊直弼を暗殺（桜田門外の変）してこれに報復した。

長井長義は、安政六年、十五才で幼名朝吉を直安と改めて元服した。彼は藩主斉裕公に謁見し、そのときすでに一人前の医師として、父君の代診さえ勤めていた。

直安は気分転換のつもりで剣術の修行をしようと思ったが、竹刀を振れば鍼療法で使う手が荒れるという父君は、これを許さなかつた。やむを得ず、隠れるように剣客の叔父に頼んで道場に通った。

漢学を学んだ長井は西洋の学問を侮蔑し、洋学を白眼視していたが、漢学の先生宅で床の間に新式の鉄砲が飾つてあるのを見付けて非難すると、先生曰く、在来の火縄銃では攘夷を唱えても敵を制することはできない。たとえ西洋からの到来物でも、これを使って国のためになれば良いのではないか。翻意した長井は、蘭学の学校に通うことになった。

ときは安政元年（1854）日米和親条約が締結されたが、その年十二月四国地方に大地震が起つた。多数の家屋が倒壊して騒然とした。起居歩

行は困難となり、夜は竹林に臥す有様で、祖母は炬燵の灰の中に甘藷を入れて長義の朝食を整えたという。

波乱万丈の開国前夜、幕府はアメリカ、オランダ、ロシア、イギリスとの通商条約に調印、洋書の購読を奨励し、オランダ医術を許しつつ、一方では勤王の志士を捕えて投獄していた。

長崎留学の途につく

慶応二年（1866）、藩主斉裕公は洋学を学ばせるため、藩の英才を選抜して長崎に留学させた。長井はその選に入り、父琳章に対して「洋学修行のため長崎に遣わす」旨の命令書が届けられた。琳章は長崎での修行は「医学修行」のためと思つてい

たが、藩主の「以下次ページ」*前ページよりV意向では、医

地域情報

新座市では・・・

観光ボランティアガイドの「コラボ」で、雑木林とせせらぎのまち・新座の歴史・文化・自然を満喫



右はベストセラーの観光ガイド

通常のコースは野火止用水、平林寺、又はその双方の三つ、一〜三時間、無料（平林寺入山料三百円は負担）だが、申込者との相談に応じて取り決めるという。希望日の3週間前までに申し込む。

新座市観光ボランティアガイド協会（事務局：新座市観光都市づくり推進室）宛て
電話 048-477-1111（内線：109）FAX 048-477-1548

志木市では・・・

男性合唱「志木グリーククラブ」

発足して十八年、初めての演奏会を、去る三月十五日（日）志木市民会館大ホールで華やかに開催した。同じく志木市の「ドン・キホーテ男性合唱団」の賛助出演、志木第九の会の後援によって当日の「ファミリーふれあいコンサート」は聴衆を魅惑した。

新座市文化協会三十周年

十一月三日、市民会館に於いて記念式典を挙

文化協会加盟8団体の公演の「天地人」、新座交響楽団の演奏などが上演され、また市内の「バルセゾン」で祝賀会を開催。上田埼玉県知事ほか多くの来賓を得て、来賓には「三十年のあゆみ」野火止ワインが贈呈された。

なお今年二月には、記念事業の一つである「新座市文化協会三十年史」が完成して、会員に配布された。協会が掲げるフレーズは、

「文化のきらめき未来」





きの中には、長崎に到着後、接潮を待ち、島原に渡る。島原の語られている。はじめは精得館城門前を過ぎ、城郭を一周する。待望の長崎に着き、旅装を解いた直安は、翌十九日先ず大浦を訪れ、仏天守堂（大浦天主堂、病室でマンスフェルトの診察、手帕リ外国宣教会によって献堂式が行なわれたため、人々はこれをフランス寺と呼んだ）に入つて、西洋館の美しさに見とれた。雲仙岳が見え、煙を上げていた。廿六日には幸野宅を訪れ、はじめてホトカラヒー（写真術）を見る。彦馬は化学を勉強し、蘭書（オランダの書物）で発見した写真術に興味を覚え、仲間と共同研究を行ない、湿版写真をもつて撮影することに成功したのだった。直安は彼の屋敷に下宿することになり、化学の不思議さを目の当たりにした。薬品の調合を習い、硝酸銀から湿板を作り、現像液から生ずる塩化銀を還元してふたたび硝酸銀に戻す仕事を手伝った。

二冊の長崎日記

直安は旅路の日記として、「崎陽紀行」、「瓊浦日抄」を残したが、崎陽は長崎のこと、当時の流行で、標題を漢語風に書いた。「朴堂」の署名があり、直安はこれを長崎時代、漢詩を書くさいなどに使った。

また瓊浦は長崎港の古名、瓊の浦から取られた。長崎留學時に書かれたこれら二冊の日記は、日本と西洋文化とが激突する時代を生きた直安が写し取った記録としても貴重である。

徳島を出立して長崎に向つたのは、同行者五名と付添いの下僕一名、先ず陸路、四国地方を東から西に横断するルートをと

り、徳島から一路西に進路をとった。十二月三日、松山領道後を経、険しい道を往きつづ、五日には大洲領内に入つて一泊、八幡浜港（現在の八幡浜市）に達し、十二月六日海路佐賀之関（現大分市）に向う。順風を得て波は穏やか、その夜上陸した。行く道は霜が甚だしく、雪道を辿つて十三日には内の牧（現在の熊本県阿蘇町内牧）を発つて五十万石の城下町、熊本に向う。熊本市内の磯辺、梅洞で暮れ

学

潮を待ち、島原に渡る。島原の語られている。はじめは精得館城門前を過ぎ、城郭を一周する。待望の長崎に着き、旅装を解いた直安は、翌十九日先ず大浦を訪れ、仏天守堂（大浦天主堂、病室でマンスフェルトの診察、手帕リ外国宣教会によって献堂式が行なわれたため、人々はこれをフランス寺と呼んだ）に入つて、西洋館の美しさに見とれた。雲仙岳が見え、煙を上げていた。廿六日には幸野宅を訪れ、はじめてホトカラヒー（写真術）を見る。彦馬は化学を勉強し、蘭書（オランダの書物）で発見した写真術に興味を覚え、仲間と共同研究を行ない、湿版写真をもつて撮影することに成功したのだった。直安は彼の屋敷に下宿することになり、化学の不思議さを目の当たりにした。薬品の調合を習い、硝酸銀から湿板を作り、現像液から生ずる塩化銀を還元してふたたび硝酸銀に戻す仕事を手伝った。

また瓊浦は長崎港の古名、瓊の浦から取られた。長崎留學時に書かれたこれら二冊の日記は、日本と西洋文化とが激突する時代を生きた直安が写し取った記録としても貴重である。



また瓊浦は長崎港の古名、瓊の浦から取られた。長崎留學時に書かれたこれら二冊の日記は、日本と西洋文化とが激突する時代を生きた直安が写し取った記録としても貴重である。

また瓊浦は長崎港の古名、瓊の浦から取られた。長崎留學時に書かれたこれら二冊の日記は、日本と西洋文化とが激突する時代を生きた直安が写し取った記録としても貴重である。

また瓊浦は長崎港の古名、瓊の浦から取られた。長崎留學時に書かれたこれら二冊の日記は、日本と西洋文化とが激突する時代を生きた直安が写し取った記録としても貴重である。

また瓊浦は長崎港の古名、瓊の浦から取られた。長崎留學時に書かれたこれら二冊の日記は、日本と西洋文化とが激突する時代を生きた直安が写し取った記録としても貴重である。

また瓊浦は長崎港の古名、瓊の浦から取られた。長崎留學時に書かれたこれら二冊の日記は、日本と西洋文化とが激突する時代を生きた直安が写し取った記録としても貴重である。

Bird's Eye 東京もの語り

景観隅田川の橋梁その三

永代橋

「永代橋」を渡つて「永大通り」の進路を西にとると、日本橋川の南側に沿い、茅場町、日本橋八重洲を経て大手町に達する。東に向えば、門前仲町は目前で、木場に通じている。

大正十五年（1926）十二月に竣工した永代橋は、放物線状の大規模ソリッドリブアーチを中心とする荘重な造形によって、近代的橋梁美を実現している。また建設当時は、我が国最大の支間を実現した鋼アーチであった。永大通りに面して「富岡八幡宮」が鎮座し、境内には鳳凰の目に数々のダイヤモンド、ルビーを嵌め込んだ重量四、五トンの日本一の大神輿が飾られ、またここから全国の測量の度に出



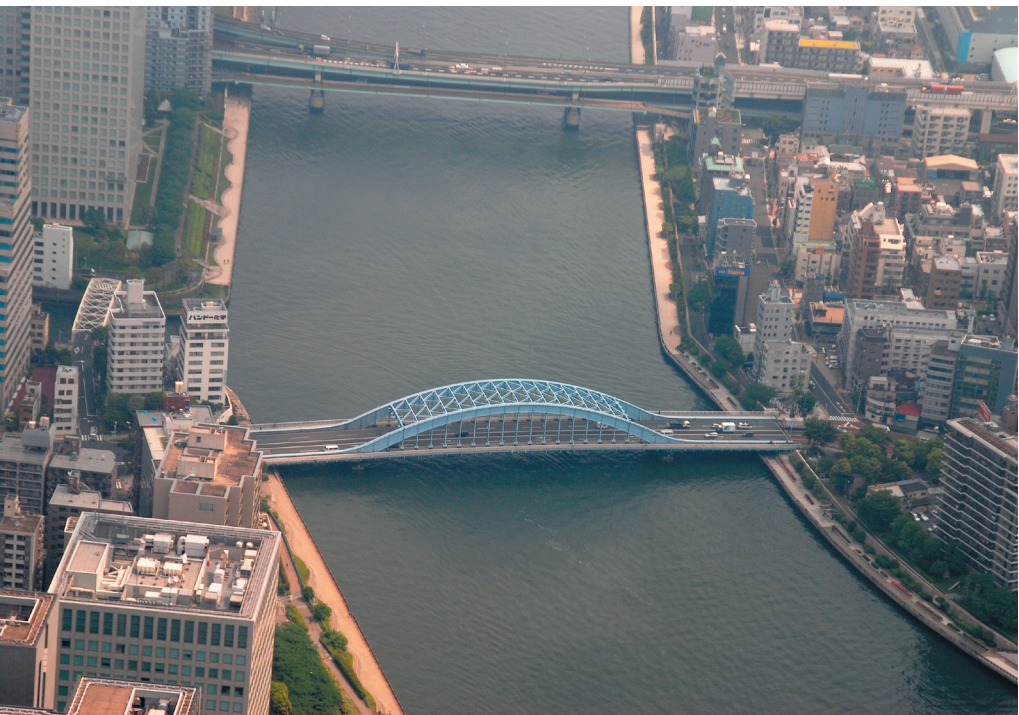
発した伊能忠敬の像が立つ。真夏の八月、早朝から各町内神輿五十五台の連合渡御は永代橋を回り、名物の水掛けでクライマックスを迎える。

この橋の左岸、佐賀（佐賀町）の辺りにはかつては永代島といっていた。徳川家康が入府した頃は、蘆が生い茂る干潟だったよ

うだ。文化四年（1807）深川富岡八幡宮の祭礼の日、見物客が押し寄せ、深川寄り三間ばかりが踏み崩された。知らずに後から押し寄せた群衆はつぎつぎと川に転落、死者は一五〇〇人余りに及んだ。

永代橋は、明治七年（1874）木橋最後の橋として架け替えられたのち、明治三十年（1897）鉄橋として架橋された。三年半の年月を要し、その位置は江戸時代の橋よりやく150メートル下流、日本橋川の南で、曲弦プラットトラス三連、工費は当時の八万円以上にのぼる巨大な橋であった。しかし大正十二年の関東大震災で大破した。そのころまだ勝鬃橋は無く、永代橋が隅田川の第一橋梁であった。橋の形式を決めるに当たって、本地点は雄大な環境

ではないかとの設計者の思いがあったようだ。今日見られるような帝都に相応しい筋肉隆々たる男性的な姿は、建設当時は周囲に高い建物が無く、一際目立つ存在だった。



永代橋

地域の先駆だった！

町立「志木商業学校」の追憶（その三）

戦前のことになるが、現在の朝霞、和光、新座、志木市、富士見、ふじみ野市、三芳町一帯には、現在の公立中学校、高等学校に相当する教育機関はなかった。小学校を卒業してのち川越、浦和に在った男子の中学校（当時は四、五年制）に、あるいは女学校に進学できるのは限られた資産家の子弟に限られていたのである。

支える財政基盤が弱くなったことなどが挙げられるが、当時小学校に間借りしていた新制中学校の校舍を準備しなければならぬという差し迫った状況の中で、志木商業を廃校にして、その校舍を中学校の校舍に充当しようという安易な気持ちが行き着いたに違いない。

志木町は、現在の富士見市水谷、朝霞内間木地区と合併して、志紀町と名称を改めたが、間もなく、昭和二十三年三月、両地域は合併を解消、「志木町」は規模を縮小した。これらの政治的な変動や政治に関心が大きかった一部の市民の思惑も大きな影響をもっていた。

当時の埼玉タイムスを手掛かりに検証してみたい。

昭和十四年（1939）に開校した「志木町立商業学校」は、地域の先駆としてまさに快挙であった。しかるに、地域の政治、経済に翻弄され、僅か十年で閉校となった町立志木商業の運命は、現在の激動する政治と経済時代に生きるわれわれ市民にとっても、決して無縁ではない。忘れるべき歴史の「コマ」でもない。

実は、「志木商業」解体の前年十月の志紀町会協議会で、出下庄太郎町議の動議「志木町において高校昇格をした上、組合立に移行する」旨の提案があり、満場一致これに賛成して昇格の決議をしている。その後、町村分離運動が起こっても、分離派の議員は最後の議会の席上で分かれても高校の問題は絶対支持する」として、今までの路線を継承する旨の発言があった。



昭和39年ころの足立町議会

創立後暫くは志木小学校に間借り生活を余儀なくされ、やっと自前の校舎が完成したのは、昭和二十一年十一月だったから、その建設を夢見ていた校舎が実際に使用できたのは、わずか二年数か月に過ぎなかったのである。仮定ではあるが、もし廃校することなく存続していれば、やがて当時の志木町ほかの組合立から県立への移管も検討されたであろう。県立への移管が実現していれば、四市内での初の県立普通高校になった可能性もあった。

廃校の原因としては、志願者が減ってきたこと、「志木町」が

霞町は積極的、また高橋新町長の出身母胎である内間木村は組合立に熱意を見せた。しかしそのほかの町村の消極的な姿勢はともかくとして、お膝元である分離後の志木町の新町議の多くが、財政難を理由に高校反対説を唱えた。

七月には小山町議から「組合立不可能となった今日、即時廃校の決議を行うべし」との動議が出された。これに対して、金剛興照議員は、未だ十分検討の余地があり、廃校決議は時期尚早」と反対意見を述べた後、採決に入るところ、九対十二で廃校決議は不可となった。一方、PTAや後援会、卒業生らも高校救済のため積極的な運動を始めていた。



昭和39年ころの足立町議会



昭和初期・志木町商工会の記念写真

議会懇談会が開かれ、出席議員十八名が「志木町の単独経営を離れて他の方法により存置する」との玉虫色の申し合わせをして調印した。

一方、朝霞区行政支会では、荒井支会長名で、組合立についてその協力の如何を協議するための町村長、助役、議長などの全体会議を招集することにした。

九月に入ると、七日には地元選出の高須七三郎県議が志木小学校に吉田副知事、細谷教育長を招いて、学

空撮・カラー・特集記事のオムニバス
本紙が責任編集する Creative Book



- 1号 先端のサイエンス・テクノロジー
- 2号 東京駅 / ヒトの英知は何処からきた？
- 3号 東京大学 は知の頂点を目指す！
- 4号 江戸から東京 江戸城築城から皇居へ
- 5号 大名庭園 浜離宮恩賜庭園、清澄庭園
- 6号 アロマテラピーのサイエンス
- 7号 江戸城完工 甲良家の遺産は語る
- 8号 山手線誕生の物語

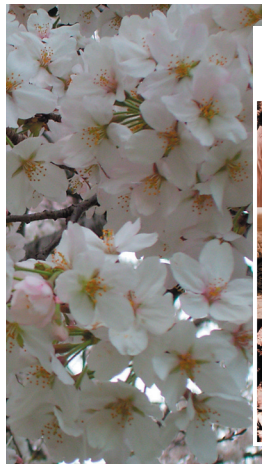
B5版 100ページ(カラー50ページ) 定価 各630円

みやかわ(宮川書店)本店に全巻常置されています
志木市本町1-11-32 TEL: (048)487-1112

かつての志木市は、醸造、肥料、呉服、雑貨、履物などの大店が軒を連ね、川越や浦和にも引けを取らない商業の町だった。

この写真の背後は当時としてはモダンで、絵葉書にもなった「志木小学校」の校舎で、記念写真の良き場所として選ばれたのである。

「町立志木商業学校」が開校するときには、その前に新校舎が建ち、旧校舎になっていた。志木商業は、若者の夢を載せて、ここで開学したのである。



左は「ニュータイムス」最近号

このたびニュータイムス社のご好意により、同社の情報誌「ニュータイムス」をご購読されている読者に、本誌「市民プレス」を同梱・配布して戴くことになりました（お申し込みは「ニュータイムス社」TEL. 048-486-6138 FAX 048-471-3240 E-mail: newtimes-net@nifty.com にごうぞ）

本紙発行日の変更…本年一月から年四回発行となります（二、四、七、十月、各月五日）

お知らせ

特定非営利活動法人

NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行って、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配付します。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL090(3048)5502

編集部 原宛にどうぞ